死にたがりは仮面をかぶる

少年　G

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

死にたがりは痛みの感じないＳＡＯの中で何を望む？

目　次

プロローグ ―― 1
巨乳 ―― 3
突然の訪問 ―― 7

プロローグ

生きてるのは怖くないか？

僕は怖い。それはもう、今すぐ逃げ出したくなるくらいに。
だって、生きるということは傷つく可能性があるということで。
だって、生きるということは苦しむ可能性があるということで。
生きるということは、誰かを傷つける可能性があるということだから。

生きることを例えるなら、いつ落ちるか分からない吊り橋の上を歩いているようなものだ。落ちる理由は様々で、病気、事故、事件、落ちる理由には事欠かない。そして、落ちた先は『死』が待っている。まだ生きてる僕たちはまったく想像のできない『死』という概念。だけど、本能的に分かる。それは知らない方が良いことで、知ってはいけないと。

でも、僕は早く落ちたい。いつ落ちるか分からずにドキドキしてるよりも、さっさと落ちて楽になりたい。それに……痛いのは嫌いだ。だけど、病気、事故、事件、落ちる理由は痛いことばかり。そんな嫌な思い出で自身の最期を飾りたくない。

だけど、自分から落ちる方法はもっと酷い。首吊り、投身、入水、拷問と間違えそうになる。いや、拷問は相手を死に近づけて脅す行為なのだから当たり前なんだけど……それでもキツすぎる。

結果、僕はまだ吊り橋から落ちていない。そう、まだ死んでいない。まだ、このいつ落ちるか分からない橋の上を渡っている。

あぁ。痛みを感じずに死ねる方法はないものだろうか？

今日も俺は自分の恐怖をポーカーフェイスという仮面の下に隠し、社会の歯車の一つとして学校へ向かう。

巨乳

中学３年生に進学して一週間がたった。
うちの学校では、クラス替えが毎年行われるので、最初の一週間は凄く大切だ。
この一週間でクラス内での自分の立場や初めて同じクラスになった人に対する印象が決まる。
逆に言えばこの一週間を乗り切れば、パシられたり友達がいないなんてことはなくなる。

そう言う意味で言うなら俺は今回成功者だろう。
始業式が終わったあと新しく決まった教室に入る。
クラスでの出席番号表で自分の名前を探す。
えーと、あった。小林蓮、１２番。
だから、前から１２番目の席に座る。
隣の席の女子が美少女だったことを喜びつつ、後ろの奴に話しかける。
そいつの名前はどうやら桐ケ谷和人というようで顔は中性的な感じの男子だ。
取り敢えず、と思いながらゲームの話題を振ると異常に食いついてきた。
俺もまあまあゲームが好きなので話題はどんどん膨らんでいく。
気づいたら「今日、俺の家に来ない？」と誘われていた。
俺はもちろんうなずいた。
イケメンと言っても良いだろう顔に老人受けしそうな笑顔を張り付けて。

★★★★★

ホームルームも終わり家で昼ごはんを食べてゲームを持ち家を出る。
そして、何気に気に入ってるマウンテンバイクに跨り和人の家へ走る。

表札に桐ケ谷と書かれた家に着くと外で和人が待っていた。
友達思いの良い奴だと思いながら声をかける。
「和人！」
「ん？あぁ……蓮。随分と早いな？あと１０分くらいは待つと思ってたんだけど」
「昼飯、おにぎり一個しか食べなかったからね。早く遊びたかったんだよ。お前もだろ？和人。そうじゃなきゃ１０分待つと思いながらも外にいるなんておかしいもんなあ？」
にやにやが止まらない。

「そんなことは良いから早くゲームしようぜ」
露骨に話を逸らす和人にさらに俺のにやにやは加速するが、ここは大人の対応をしてやる。
「そうだな。俺もお前がおもしろいって言ってたゲームが早くやってみたい」

二人でわいわいゲームの話をしながら家へ入っていく。
すると縁側のガラス戸が開けられ一人の少女が降りてきた。
俺の視線はまず足を見てそのまま上がっていき、胸で止まった。
顔じゃなくて胸で止まった。
その胸は綺麗な球の形で弾力性が高そうだった。
そして何よりも……大きかった。
もう一度言う、凄く……大きいです。
ふと顔を上げるとその素晴らしい胸を持った少女と目があった。

左を向くと、突然足を止めた俺を不思議に思った和人がこちらを見ていた。

「今、胸をガン見してたよね？」

気づかれてたー!!

待て、待つんだ。

今こそ、その虹色の脳細胞を活かす時だろう。

少女の言葉はまだ疑問形だった。

まだ……誤魔化せる筈!!

「そんなわけないよ。初対面の少女の胸をガン見するような男に僕が見えるか？」

「見える。実際見てたし」

即答でバレてたー!!

全然誤魔化せなかったー!!

……こうなったら仕方がない。紳士の奥義を見せてやろう。

地面に膝をつく。

その姿はまるで神に祈りを捧げるかのよう。

手を地面につける。

その付け方はタコの吸盤のよう。

頭を地面に擦りつける。

その密着度はまるで磁石のよう。

それは、日本人の伝統的な技。

父から子へとみゃくみゃくと受け継がれてきた紳士の技。

その名も――――土下座。

この技を使えばどんなに怒ってる人でも許してくれるという神の御業。

多くの男性はこの技を浮気がばれた時使う。

その御業を俺も使った。

さあ、彼女の反応は――？

「そんなことをしてもゆ、許さな「胸を触らせてください」いんだから……は？」

「その素晴らしい胸!! お願いだから触らせてくれ!!」

俺の頭はついには磁石を超え、砲丸のように地面にめり込んでく。

けれど、待てど暮らせど返事が来ない。

不思議に思って顔を上げるとそこにはＰＳ４を持った少女がいた。

後ろでは和人が「やめてくれー!!」と泣き叫んでる。

……返事が遅かったのはこれを取りに行ってたからだろう。

そして少女は俺の頭に向かってそれを振り落した。

衝撃で意識が消えていく中聞こえてきた「変態は死ねー!!」という言葉を聞いて、これで死ねたら良いな。こんなに痛いんだから。

やっぱり俺に自殺とかは無理だなぁと思った。

突然の訪問

そんなこんなで和人のＰＳ４にちょっと凹みができたが、後は普通にモンハンとかやって帰ってった。

帰りの時はあの少女――和人の妹らしい――とは出会えなかった。

……もう一度あの胸を拝んどきたかった。

……なんて回想は終わりにして現実と向かい合おうか。

「何しに来たの？変態」

そう、俺はあれから一日たって、今日も和人の家へ遊びに来たのだ。

……和人には何も言わずに。

だって、あいつ引きこもりっぽいじゃん。

家出て遊んでるイメージないんだもん!!

そんなヤツだったら突然家に遊びに行っても家にいると思ってもおかしくないだろ!?

……現実は無情で、和人は外に出かけてて、俺がインターホンを押したら和人の妹が出てきて、この前のことで印象が最悪な俺に尋問中という悲しい状況だ。

誰かどうにかしてくれ……。

「もう一度聞くけど何しに来たの？変態」
和人の妹が腰に手を当てながら聞いてくる。

「だから、和人と遊びに来たって言ってるだろう。巨乳」
俺は正座した状態で答える。
「巨乳は名前じゃなーい!!あたしの名前は直葉!!」
「いや俺だって名前違うから。変態なんて名前じゃないから。蓮っていう名前あるから」
もうなんか、アレだ。ムッキーって感じで直葉が怒ってる。
……ちょっと可愛いかも。もうちょっとからかっても……良いよね？

「ただいまー。ってどうしたの？スグはなんか怒ってるし、何か蓮はいるし」

「おー。和人じゃないか。お邪魔してるよー。今はアレだ。ドツキリ失敗？んで、怒られてる。つーか、和人は何しに外に出てたの？」

「あぁ、ちょっとＳＡＯのβ版パッケージを貰いにね」
「え？お前も当選したの!?。……どうしよう」
「お前もってことは蓮も当選したの!?でも、どうしようって？」
「いや、俺さ……数打ちゃ当たる!!みたいにさ、家族の名前全部使って応募したんだよね。そんで２枚当たっちゃったんだよ。だから、和人にあげようと思って今日来たんだけど」
「あぁ、なるほどね。うーん。……スグにあげちゃえば？」

「……えっ。私っ!?」
今まで蚊帳の外だった直葉ちゃんが急に振られて焦ってる。
……やっぱ可愛い。うん、可愛い。

あの、胸が良いよね。形といい、大きさといい。
惚れてまうやろーーーー!!

……にしても直葉ちゃんにねぇ……うん、良いんじゃない。
「そうだね、和人。直葉ちゃんにあげるよ。はい」
直葉ちゃんにパッケージを渡す。

「え!?で、でも私ヘッドギア持ってないんだけど……」
「あぁ、それなら大丈夫だよ。家に何個かあるから。一個くらいならあげるよ」
「ちょっと待って蓮!!なんでヘッドギアを何個も持ってるの!?」
「それは……聞いちゃいけない秘密だよ」
俺は人差し指を口元で立ててニヤリと笑いながら言う。
「あ、うん。そう……だよな。秘密か……ん、わかった」
まぁ、ただお金が有り余っているだけなんだけどね。

「じゃあ、アインクラッドで会おう!!」
そう言いながら、俺は和人の家から帰っていった。